

シンポジウム事例紹介④

市教委等既存事業を組み入れた 新しい博物館イベント《みんなの理科フェスティバル》の経緯と現状

横須賀市自然・人文博物館 内船 俊樹

はじめに：当博物館学校連携の近況

横須賀市自然・人文博物館（以下、当館）における近年の学校連携については、当館の6つの「使命」の一つ「学校教育に役立てる」のもとで実施する、次の3事業を挙げることができる（内船、2019a）。

一つ目は小学校社会科で、具体的には3年「昔の道具とくらし」[民俗]と6年「大昔の暮らし」[考古]である。来館する学校のニーズに合わせ、博物館の講座用の部屋に民俗資料や考古資料を並べ、常設展示見学とともに実物資料に触れ、学芸員の解説を行う。

二つ目は小学校理科の教員研修で、これは市教育研究所が主催し、市立小学校の教員研修メニュー内に位置づけられている。2000年以降、一時的に「総合的学習等の対応」としてピオトープ指導など小学校から博物館への出講依頼が相次いだものの次第に下火となり（図1）、地元出身でない若手教師の増加や中堅世代の教員の人材不足によって不足する地域の自然への理解を深める機会

として、同所の提案により2010年頃から始まったものである。

三つ目は小学生等の理系キャリア教育を展望するイベントであり、後述する本稿の主題である「みんなの理科フェスティバル（以下、理科フェス）」である。

これら3事業以外に、学芸員が学校からの様々な見学対応や出前授業の依頼に応じてはいるが、地域内の公立小学校数と対応可能な学芸員数のバランスを考えると個別対応には限界がある。博物館としては、一つ目に挙げた小学校社会科のような、単元に合わせた時期に集中して学年単位の博物館見学を受け入れる対応が、効果や効率を考えると望ましいと考える一方、こうした対応が可能な教科や単元は限定的であり、特に自然科学分野では、博物館を訪問して自然史資料を見学するよりも学芸員が出講して校内や校区の自然を解説することへのニーズが大きいため、効率化が難しい。したがって、小学校理科では教員に対する研修が現実的な選択肢であると感じられる。そのような状況

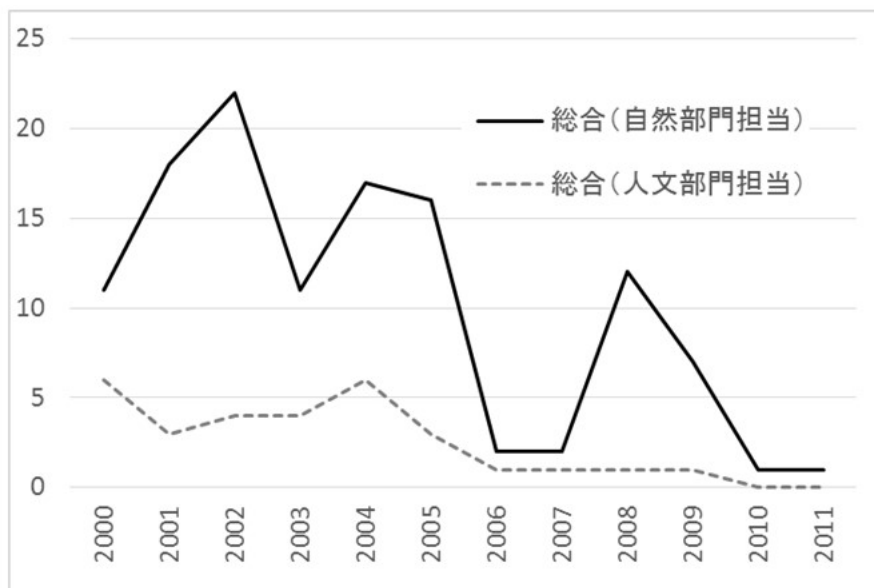


図1 総合的学習等への対応として当館学芸員による小学校への対応件数。
内船 (2019a) より。

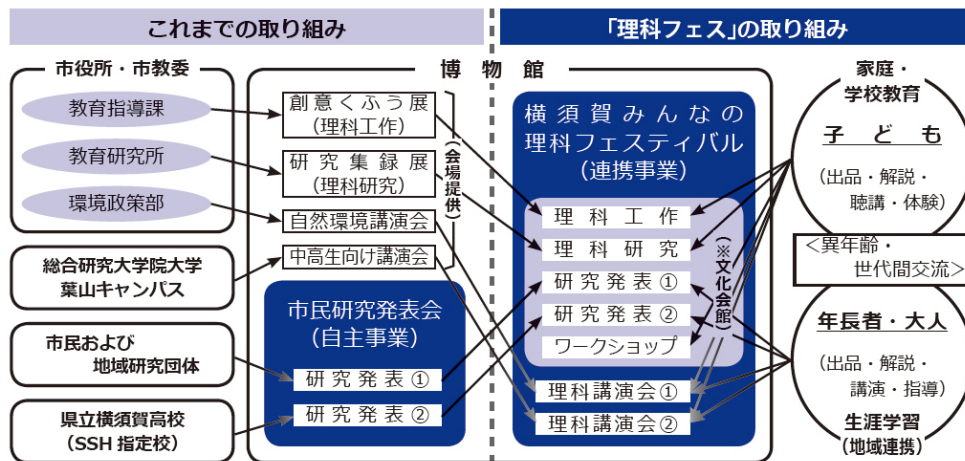


図2 理科フェス企画の際にまとめた、既存事業と外部連携先との対応、新旧事業の対応関係、新事業の対象や効果。内船（2019b）より。

で近年立ち上げた「理科フェス」は、学校との直接的なつながりこそないものの、関心の高い児童生徒へ広域的にアプローチできる手段として、かつ地域における博物館の存在感を高める手段として意義を感じており、現在もなおその可能性を追究している。

1. 理科フェス開催の経緯

理科フェスの開催経緯については、内船（2019b）において生涯学習への取り組みという視点からまとめている。

図2はかつて第1回の理科フェス企画時の説明および助成申請に用いた図である。見てのとおり、当事業は過去に博物館で開催されてきた外部事業や自主事業を統合するために打ち出した新規事業という側面があるものの、その当初からキャッチコピーを“子どもから大人まで、みんなが「理科」でつながる”とし、小学生をはじめとする子どもの理系キャリア教育への寄与を謳う事業とした。その背景は2つあり、一つは当館を利用した市教委主催の小学生の作品展示（自由研究および理科工作）が既にあり、その担当部署の協力のもと、各作品について《児童とその保護者》⇔《所属小学校(長)》⇔《市教委(担当部署)》の流れで調整が行われ、実現性を高められる勝算があったことと、もう一つは、地元企業による理科教育系研究助成を得るために、博物館が行う社会教育領域の事業から小学生の理科教育への貢献を展望したことである。

2. 理科フェスの開催概要

理科フェスとは、博物館があらゆる世代の科学的な探究活動を《理科》の名の下で受け入れ、集約的な場所と時期を調整・確保することで、出展者や来場者の学習機会の最大化を試みる事業である。そのため、従来個別に博物館で出展を受け入れてきた外部事業の主催団体や部署と調整を行いながら、集約的なメイン会場として博物館に隣接する横須賀市文化会館のギャラリー室を確保した。実施内容の基本的な構成は、① 研究および学習成果の出展（図3）、② 展示・講演会やワークショップなど《理科》の入口となる出展（図4・5）、③ 発表会や来場者を巻き込んだ交流会（図6～8）、である。この構成に沿って、2017年度に開催した第1回以降、原稿執筆時点で直近となる2024年度の第8回までの理科フェスの概要をまとめると表1のようになる。

当初（第1・2回）は平日の開催日程も含んでいたが、これは総合のような科目での来場を小中学校向けに呼び掛けることを意図したものである。しかし、学校見学での来場は実現しなかったことから、第3回から公開日を土日の2日間に縮小することにより、使用料の差額をメイン会場の拡張（文化会館ギャラリー室を1室から2室へ）に充てることとした。これにより、研究および学習成果の出展（表1の①）数を増加させることができた。一方で、来場のきっかけになるような《理科》の入口となる出展（表1の②）を促すことで、近年（第7・8回）はワークショップの件数が増加した。当初は12月の開催時期だったところを1月に変更し

表1. 理科フェスの開催概要まとめ

回	開催日	概要	来場者数
1	2017年12月14日(木)～19日(火)【6日間】	①小中学生14件, 高校生6件, 一般23件【計42件】 ②博物館3件(ワークショップ・外部巡回展・講演会各1件) ③12月17日(日)午前・午後二部制で発表・交流会	1,586人 (532+1,054) ※土日小計:1,013人
2	2018年12月14日(金)～17日(月)【4日間】	①小中学生10件, 高校生21件, 一般14件【計45件】 ②博物館4件(ワークショップ・外部巡回展・展示解説・スタンプラリー各1件), 外部6件(ワークショップ5件, 講演会1件)【計10件】 ③12月16日(日)午前・午後二部制で発表・交流会 ※12月15日(土)に県主催科学イベント誘致	2,143人 (740+1,403) ※土日小計:1,945人
3	2019年12月14日(土)・15日(日)【2日間. 以下同】	①小中学生33件, 高校生23件, 一般5件【計61件】 ②博物館5件(ワークショップ・企画展・パネル展・展示解説・スタンプラリー各1件), 外部6件(ワークショップ5件, 講演会1件)【計11件】 ③12月14日(土)午前・15日(日)午後の二部制で表彰式および発表・交流会	1,136人 (363+773)
4	2021年1月23日(土)・24日(日)	新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止	—
5	2022年1月22日(土)・23日(日)	①小中学生53件, 高校生17件, 一般6件【計76件】 ②博物館3件(ワークショップ・企画展・展示解説・スタンプラリー各1件 *うち1件中止), 外部6件(ワークショップ6件, 講演会2件, パネル展1件 *うち3件中止)【計9件】 ③1月22日(土)午前・23日(日)午後の二部制で表彰式および発表・交流会 (*いずれも中止) *新型コロナウイルス感染拡大防止のため事業の一部を中止	2,185人 (781+1,404)
6	2023年1月21日(土)・22日(日)	②小中学生48件, 高校生20件, 一般10件【計78件】 ②博物館4件(ワークショップ・企画展・パネル展・スタンプラリー各1件), 外部8件(ワークショップ8件, 講演会1件 ※うち1件中止)【計11件】 ③1月21日(土)午前・午後の二部制で表彰式および発表・交流会	2,343人 (849+ <u>130</u> +1,494) ※下線については表外コメント参照(以下同)
7	2024年1月20日(土)・21日(日)	①小中学生47件, 高校生13件, 一般6件【計66件】 ②博物館3件(ワークショップ・トピックス展・スタンプラリー各1件), 外部10件(ワークショップ8件, 講演会1件・パネル展1件)【計13件】 ③1月20日(土)午前・21日(日)午後の二部制で表彰式および発表・交流会	3,239人 (1,270+ <u>211</u> +1,758)
8	2025年1月25日(土)・26日(日)	①小中学生42件, 高校生14件, 一般8件【計64件】 ②博物館4件(ワークショップ2件, 外部巡回展・スタンプラリー各1件), 外部13件(ワークショップ12件, 講演会1件)【計17件】 ③1月25日(土)午前・26日(日)午後の二部制で表彰式および発表・交流会	3,403人 (1,228+ <u>95</u> +2,080)

上表は当館館報65～72号に基づくが、「概要」の①～③については、未公表データを含め本文で触れた理科フェスの基本的な構成①～③に沿って整理した。「一般」には大学生、大学院生、大学教員、博物館、行政、市民研究団体などを含む。「来場者数」のカッコ内は互いに隣接する2会場の内訳(メイン会場[文化会館]+サブ会場[博物館])を示し、第6回以降はメイン会場と同建物の別会場で行った表彰式や講演会等の実績(下線)を加算。



図3-8 過去の理科フェスの様子。

(上段左)図3 理科工作および研究ポスターの展示会場。(上段右)図4 高校生によるワークショップ会場。(中段左)図5 一般(市民研究団体)による展示・ワークショップ会場。(中段右)図6 展示会場の一角をステージとした発表会。(下段左)図7 発表会では全出展者が作品画像の前で2分ずつPR。(下段右)図8 市教委と理科教員らが企画・実施する小学生表彰者による発表会。

たり、表彰式会場を別途確保したりするなどの工夫は次項で述べる。

3. 理科フェス開催を通じた学校教育セクションとの連携深化

これまでの開催を通して、理科フェスが学校(市

教委、市内所在のSSH指定県立高校)に対して調整および提案によって連携深化を図れた点を次に3つ挙げる。

①開催時期の調整(12月→1月)

小学生作品の出展スケジュール(県や全国への推薦作品の返却に合わせた開催)だけではな

く、同じ建物の別室で開催される書画作品展(国語科)と開催週末を合わせたことにより、別教科のイベントと相互に集客効果を高めた。また、SSH指定高校の校内発表会(当時、同じ会場で平日に開催していた)の撤収と理科フェスの準備を重ねることにより、会場使用料を抑えることに成功した。

②小学生作品の表彰式・発表会の誘致

小(中)学生作品の表彰式や発表会は、これまで市教委(正確には同委員会学校教育部内の所管課と小学校理科研究会との共催)が別日・別会場で実施していたが、前項で削減した会場使用料で同日・同建物の別室を借り表彰式を誘致し、終了後に理科フェス会場へ移動(同じ建物の1階→3階)して発表会(図8)を行ってもらった。これにより表彰式に参加する親子約100名が、理科フェスに必ず参加する流れをつくるとともに、市教委幹部や表彰式・発表会の運営教員(市立小学校の校長や理科教員など)が理科フェスを認知する機会になった。

③県立高校生の発表の場の拡大

市内所在のSSH指定県立高校には、当初から高校生の成果発表の場の一つとして理科フェスを利用してもらっていたが、当館貸出しの昆虫標本をもとに美術I履修生徒が制作した点描画の出展や、同高生徒による発表会の司会、同高が呼び掛けた隣の他の県立高校と合同で各校科学部がブースを連ねる実演・体験系のワークショップ出展(図4)を、回を追うごとに実現させた。

上記3つの取り組みによって、当初よりも小学生や高校生の存在感が増すイベントになった。これらの年齢層は、大学・研究所などの機関や一般の出展者にとって伝えたい相手として想定される年齢層であることから、出展を希望する団体のモチベーション向上にもつながったと考える。

4. 理科フェスの現状と展望

2025年1月25・26日に開催した第8回理科フェスは、過去最高の動員数(2日間2会場[文化会館・博物館]の合算)となった。「久しぶり!」と話しかけてくる出展常連の小学生や、「実は小学生の頃に理科フェスに来たんです」と出展者側へ立つ高校生、市立小学校の校長から「昨春からこちらの小学校に異動しました」とご挨拶いただくな

ど、理科フェスをもつ学校連携の効果を実感している。本稿執筆時点である2025年10月は、2026年1月末の第9回理科フェスに向けた出展予定機関・団体と調整を行っているところであるが、SSH指定県立高校からは「小学生の発表・交流会に、より多くの高校生が参画できる機会を理科フェス内に設けるよう市教委と協議したい」との提案があるなど、新規出展を増やすだけでなく出展機関・団体間の相互作用による新たな企画についても期待が寄せられる。

本稿冒頭にて、本事業を小学生等の理系キャリア教育を展望するイベントと紹介したが、本事業は科学的な探究活動全般を分かりやすく《理科》と表現している。したがって、その展望には教科としての理科に収まらない広い学術分野で適用範囲があると考えている。筆者とともに理科フェスを支えているのは当館の自然科学部門の学芸員であるが、それ以外の《理科》——工学などの応用科学だけでなく、社会科学、ひいては民俗や歴史などの人文学——に対しても、地域の博物館として今後どう市民の探究活動にアプローチするかは、今後の学校との連携深化を考える重要な課題であると考えている。

引用文献

- 内船俊樹 2019a. 「つながり」を生かした小学校教育支援 学校へ、地域へ「つながる博物館」の取り組みと挑戦. 小川義和(編著) 協働する博物館 博学連携の充実に向けて. pp. 186-197, ジダイ社.
- 内船俊樹 2019b. 理科でつながる子どもと大人—地域文化の核を目指す「みんなの理科フェスティバル」の取り組み—, 全国科学博物館協議会 研究発表大会要旨, (26): 139-147.